

佐藤邦政 監修

## 『イラスト学問図鑑： こども哲学』

講談社、2024 年

99 頁、1,500 円（税別）

「これは**哲学**対話になっているのだろうか？」という疑問は、哲学対話の実践者（実践者とは何か/誰か？）や参加者ならば、1度は感じたことがあるだろう。

本書は、そんな疑問に少しでも応え、対話が少しでも「哲学化」する（「哲学化」とは何か？）ことを助けてくれる一冊である。

哲学対話を実施していると、ただのおしゃべり（ハイデガー的な意味での「空談 Gerede」）のようになったり、問い合わせ深まらなかつたり（深まるとはどういうことか？）することも少なくない。また、特に学校現場で哲学対話を実施する際には、現場の先生方からその意義や学問的な繋がりを問われたりすることもある。

本書はタイトルの「こども哲学」という文字通り、平易で噛み砕かれた哲学的「問い合わせ」が 38 セクションに散りばめられている。それらが 5 つの章に分類されている。

第1章：世界の根本を考える哲学

第2章：自分らしい生き方を考える哲学

第3章：自分の見方や考え方を変える哲学

第4章：私たちの社会を考える哲学

第5章：新しい時代を生きるためにの哲学

例えば第1章セクション 2 においては、「確実にわかる事とは？」という問い合わせと共に、デカルトの思想が紹介・解説されている。第2章セクション 6 においては、「“ほどよい”ってどういうこと？」という問い合わせから、アリストテレスの「中庸」思想が扱われている。第3章セクション 19 においては、「存在するって？」という問い合わせが立てられ、ハイデガーの「死への存在」概念が紹介されている。第4章セクション 27 においては、「幸福が正しい？」という問い合わせと共に、ベンサムやミルなどの功利主義が考察されている。第5章セクション 38 においては、「差別はなぜいけないの？」という問い合わせについて、フリッカーの認識的不正義が提示されている。（フリッckerの思想は、監修者：佐藤邦政氏のご専門でもある。）

以上のように本書では、「こども向け」（「こども向け」とはどういう意味か？）に簡素化された「問い合わせ」を立てることにより、「こども」に対話を促しつつ、実はそれらの「問い合わせ」が、哲学思想史における存在論・認識論・価値論などの伝統的な議論に即したものであり、哲学者の思想も網羅的に紹介されている。

私たちは「こども」と哲学対話をしている時に、思いのほか鋭い意見や問い合わせに出会う。その中には、哲学思想史や哲学者に関連する難しいものも散見される。例えば、評者が小学校で実践した哲学対話では、「こども」から認識論的な意見が出てきて、当該児童はその後、自津的にカントの書籍を購入していた。（カントも喜ぶであろう。）

すなわち、「こども」は私たち「大人」（「大人」とは何か？/誰か？）が思っているほど「こども」ではない。「こども哲学」という呼称には注意が必要であることを、「こども」が教えてくれる。

私たちは本書を通して、自分たちで「哲学する」ことと「哲学史を学ぶ（**哲学者と対話する**）」ことが両立可能であることを、「こども」と共に学んでいくであろう。

松島恒熙（信州大学）